

たまのよこやま

速報

都埋蔵文化財センターの

楽しい体験イベント

平成30年度企画展示

いよいよ佳境!!

東京文化財ウィーク期間中の10～11月にかけて行われた当センターの行事を紹介します。

東京文化財ウィークは、東京都内にある身近な文化財に触れる機会を増やすために、毎年10月から11月にかけて東京都教育委員会主催で行われている事業です。この期間には東京都内各地で文化財の特別公開や文化財に関する行事が行われています。東京都埋蔵文化財センターでも、東京文化財ウィークに合わせて8つの行事を行いました。

まず、講座形式の行事として、「縄文の村」自然観察会②、コハク勾玉^{まがたま}作り教室②、縄文食体験①・②、土偶作り教室②の4つを行いました。

皮切りは10月6日実施の「縄文の村」自然観



植物の実を観察

察会②です。講師にパルテノン多摩の学芸員である仙仁^{せん に} 径氏^{けい じ}を招き、遺跡庭園「縄文の村」で秋の植物について、「種子」をテーマに解説していただきました。参加者全員で庭園内の植物を観察しながら、普段見かける植物にも、種を残す様々な工夫があることに一同驚いていました。

同日実施のコハク勾玉作り教室②は、再生コハクを使って、大昔のアクセサリーである勾玉を作りました。滑石と違って削りにくいコハクに参加者も手間取りつつも最後にはきれいに仕上がっていました。

10月20日・21日の縄文食体験①・②では、参加者の皆さんに食材の下準備から体験してもらいました。イノシシやシカの肉を黒曜石の石器で切ったり、マテバシイやクルミを割った粉とウズラの卵やはちみつを練り合わせてクッキーにしたりと普段はしない経験を楽しんでいただけたようです。準備

した食材は「縄文の村」の焚き火で調理しました。味付けは塩のみですが、素材のうま味だけでとてもいい味になっていました。



美味!! シカ肉ステーキ

11月17日実施の土偶づくり教室②は、東京都内出土の土偶をモデルに立体の土偶を製作しました。実際に出土した資料を館内で観察した後で、作業に移りました。粘土のかたまりから土偶の形を作り出し、半分に割った竹などを使って模様をつけていきました。皆さん熱心に製作に打ち込み、素敵な作品が仕上がりました。



丘陵のビーナス製作途中

続いて、実習形式の行事として10月13日の考古学実習①—土器拓本・断面図—、11月3日の考古学実習②—石器の作り方—、11月10日の考古学実習③—石器観察・実測—の3つの行事を行いました。

考古学実習①—土器拓本・断面図—では、土器の模様を紙に写し取る拓本と土器片の断面図を実測するという作業をしていただきました。実際の遺物整理作業同様に、出土した土器片を使っての実習でした。拓本は水を使って表面に張り付ける湿拓^{しつたく}という方法で行いました。はじめはうまく土器に紙を貼り付けられず、破ってしまう人もいましたが、最後は



土器の文様を拓本で写す

きれいに土器の模様を写し取れていました。断面図では、土器片の厚みがなかなか合わず図化に苦労していましたが、最後には方眼紙上で拓本と断面図とを合わせて、発掘調査報告書に掲載できる形に仕上がりました。

考古学実習②—石器の作り方—は、今年度はじめて実施した行事でした。はじめに石器や石の割れ方・割り方について講義を行い、その後で黒曜石の破片を使っての石器製作、最後にその石器を使って



石器作りは大変！
なかなかうまくできません



作った石器でいろいろ切ってみました

みる、という流れで実施しました。石器の材料になる黒曜石は、非常に切れ味がよく危険なため、今回の行事では、黒曜石のかけらにシカの角を押し当てて、少しずつ石を割っていく「おうあつはくり押圧剥離」という方法で石器を作りました。

参加者の皆さんは、なかなかうまく割れず、思う通りの石器を作ることに苦労していました。しかし、最後には作った石器で新聞紙や魚肉ソーセージなどを切ってもらい、思った通りの形に石器を作る難しさと石器の鋭さを体感していただけたのではないかと思います。

考古学実習③—石器観察・実測—では、石器の表面に残される製作の痕跡を観察し、それを図に記録

する作業を行いました。はじめは、表面の観察がしやすい黒曜石の資料を見ながら、石の割れ方や表面の痕跡こんせきについて学び、その後、遺跡から出土した石器を観察して実測を行いました。そのままでは見づらい石の表面の痕跡を光の当たる角度を変えながら読み



石器実測はよく観察することから…

取って、図にしていくことはとても根気のいる作業ですが、参加者の皆さんも最後には観察していた石器について理解を深めることができていました。

最後に11月23日には、今年度の企画展示、『うみ蒼海わたる人々—考古学から見たとうきょうの島々—』と関連したテーマで、第3回文化財講演会を実施しました。講師には、國學院大學教授の



文化財講演会 多くの方々にご参加いただきました

うちかわたかし内川隆志氏をお招きし、「神座す島々—伊豆諸島の祭祀遺跡—」という演題で伊豆諸島の祭祀のあり方について通史的にお話していただきました。東京の島々での発掘調査や島での聞き取り調査の成果を交えて、語られる祭祀の姿は非常に興味深いものでした。

簡単ですが、今年度の文化財ウィーク関連行事の報告になります。この期間は、埋蔵文化財センターに限らず、都内各所で文化財に関する行事が行われておりますので、様々な文化財に触れていただく機会としていただければと思います。当センターでは、来年度も文化財ウィーク期間中に、様々な行事を企画する予定です。また、文化財ウィーク期間以外でも様々な行事を企画しておりますので、皆様、ぜひおいでください。
(佐藤 悠登)

川辺堀之内遺跡（日野市遺跡 No.17）は、日野市中央部の川辺堀之内に広がる遺跡で、浅川左岸の低位段丘上に立地します。遺跡に隣接する中位段丘の突端には、中世城館跡「川辺堀之内城」が存在します。今回の発掘調査は、一般国道20号（日野バイパス〈延伸〉）建設事業に伴うもので、平成28年10月から継続的に調査を実施しています。

発掘調査では、縄文時代と古墳時代、平安時代、中世・近世、近世・近代の遺構が検出されました。この中でも、遺構や遺物が多い縄文時代と平安時代、中世・近世についてご紹介します。

縄文時代では、敷石住居跡や陥し穴が検出されましたが、特に注目されるのは敷石住居跡（表紙写真）です。敷石住居跡とは、床面に石を敷きつめた住居跡で、形状は入口部分が突出して柄鏡の柄のような形をした柄鏡形敷石住居跡である事例が多くみられます。しかし、今回検出された敷石住居跡では、残

念ながら入口部分と推定される箇所が現代の用水路によって破壊されており、確認できませんでした。時期は、縄文時代中期末から後期初頭と考えられます。中心部には炉が配置されており、炉の近くでは儀礼に用いられたと考えられる石棒も1点出土しています。

平安時代では、^{だてあなしゅうきよあと ほったてはしらだてものあと} 竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝、土坑などが検出されました。竪穴住居跡は現在のところ15軒検出されています（写真1）。また、^{かいせん} 崖線に沿って平行に並んだ2条の溝が検出され（写真2）、少なくとも長さ150m以上に及ぶ区画溝であることがわかりました。日野市では、^{ひらやま} 平山遺跡や^{しんめいろうえ} 神明上遺跡などの台地や中位段丘上の集落遺跡に対する、^{ひらやま} 神明上北遺跡などの低位段丘上の集落遺跡のあり方が注目されています。したがって、低位段

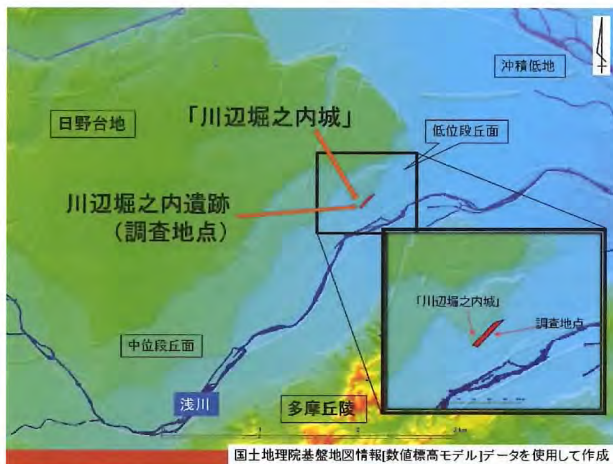


図1 川辺堀之内遺跡の位置



写真1 平安時代の竪穴住居跡



写真2 平安時代の溝（平行な2条の区画溝）

丘上の集落である川辺堀之内遺跡の調査も同様に、重要な成果となるでしょう。

中世・近世では、掘立柱建物跡や地下式坑、溝、^{たてあなしょういこう} 竪穴状遺構、土坑、井戸などが検出されました（写真3～6）。これらの遺構群は、屋敷地を構成するものです。特に、川辺堀之内城の直下にあたる部分では、大型掘立柱建物跡や地下式坑をはじめとした遺構群が密に検出されており、さらに屋敷地を取り囲むようにL字状あるいはコの字上の溝が取り囲んでいます（写真3）。今回の調査範囲では不明ですが、^{ほうけいきょかん} 四角形の溝に囲まれた方形居館の可能性もあります。この屋敷地は、隣接する川辺堀之内城に対応する中心的な居館である可能性が推測されます。他にも、断面がV字状の大規模な溝（^{やげんぼり} 薬研堀）が検出されました（写真4）。今回の調査地点から南東に約100m離れた別の発掘調査地点（日野市教育委員会調査地点）では、この溝に非常に類似した遺構が検出されています。両者は一直線上に位置していることから、同一遺構であると考えられます。また、屋敷地を構成する掘立柱建物跡などの遺構群は、上記の溝（薬研堀）を挟んだ北東側でも検出されており、川辺堀之内城直下を中心に屋敷地が広範囲に及ぶことがわかりました。

遺物は天目茶碗のような国産陶磁に加えて、^{はくじ} 白磁や^{せいじ} 青磁などの^{はくさいとうじ} 舶載陶磁も出土していますが、年代は13世紀から17世紀頃（鎌倉～江戸時代）と多岐^{わた}に亘るため、遺構についても異なる時期のものが混在している可能性もあります。また、川辺堀之内に関わる人物の文献資料として、江戸後期に編纂された『^{しせきざっさん} 史籍雑纂』に「^{たかはたこまいちぞく} 高幡高麗一族高幡不動座敷次第覚書写及び「^{たかはたふどうざしきだいのほえがきうつし} 高幡高麗一族屋敷・^{したじとうえす} 下地等絵図」の記載があり、これによると高麗氏の「^{こまさえもん} 高麗左衛門」という人物の在所を堀之内村とする記載がありますが、詳細は不明です。さらに、調査地点の南側にある^{えんめいじ} 延命寺には、^{ぶんめい} 文明2(1470)年の銘のある^{いたび} 板碑（日野市指定史跡）が残っており、その隣接発掘調査地点（日野市教育委員会調査地点）でも同時期の板碑が出土し、中世の川辺堀之内の^{やくどう} 躍動を今に伝えています。

川辺堀之内遺跡では、平成31年1月現在も発掘調査は継続中であり、今後の調査の進展が期待されます。

（守屋 亮）



写真3 中世・近世の屋敷地



写真4 中世の溝（薬研堀）



写真5 中世の地下式坑



写真6 中世・近世の井戸

多摩ニュータウンNo. 446 遺跡は、京王相模原線の京王堀之内駅から北へ徒歩 15 分ほど、多摩川の支流の大栗川に面する南向きの丘陵斜面に位置します。本遺跡の近く約 200m 南西には関東でも有数の中期の大集落であるNo. 72 遺跡があります。

本遺跡は 79,500 m²もの広範囲に及び、1988 年から 2007 年までに 7 回調査を行いました。そして、7 回目が 1960 年代から 40 年も続いた多摩ニュータウン遺跡最後の調査となりました。私は、光栄にもこの最後の調査を担当することができ、非常に感慨深いのですが、同時に大変悩んだ苦い記憶も鮮明によみがえってきます。

No. 446 遺跡は、縄文時代や古代の集落跡、



多摩ニュータウン最後の調査遠景

須恵器窯^{すえきがま}などが調査されましたが、この中の縄文時代中期後半の集落跡こそ、私を悩ませたものでした。集落は、住居跡 18 軒と小規模、営まれた期間は加曽利E 2式^{れんこもん}連弧文土器が使われた時期、放射性炭素年代測定法 (C14) によれば約 80～90 年。つまり、短命で小規模なムラであったのです。

調査成果を報告するには、ムラの変遷を把握し、分析しなければなりません。それには、住居跡 18 軒の使用順序を知る必要があります。当初、小規模で短期間なNo. 446 ムラの変遷は容易だと楽観視していたところ、分析が進むにつれて予測は裏切られ、ついに、大きな壁に突き当たります。

ムラの変遷、すなわち、住居の新旧関係を知るためには主に二つの方法があります。住居跡の「切り合い」と「残された土器」です。

一般的な集落では、家の建て替えや新築の際に古い家を壊すか住居跡を掘り返すため、発掘調査では住居跡の一部が重なる現象「切り合い」により「住居跡の新旧関係」を理解でき、土器が住居に残されるか炉などに使われていれば、変化する土器の特徴

から住居の時期を特定できます。

ところが、No. 446 のムラは、新築や建て替えの際、小規模ゆえに古い家やゴミ捨て場である住居跡を避けているために「切り合い」は少なく、加えて、短命ゆえに「残された土器」に変化の特徴がない。

つまり、同一時期の土器、土器が変化するよりも住居の建て替え、新築の方が早いのです。

結果、「切り合い」、「残された土器」から新旧関係を導き出したものは 10 軒まで、これではムラの変遷を解明できません。ここで分析を放棄しては貴重

な調査が台無し！そこで、別の方法で分析を試みました。「遺物の住居跡間接合」です。

なぜ接合するのか？例えば、炉に使う土器を打ち欠いて高さを調整し、打ち欠いた破片を別の住居跡に捨てるから。土器が住居跡間で接合する、そこには必ず新旧関係が存在します。多量の遺物の接合は、答えのないジグソーパズル、相当な時間と何よりも根気が必要です。結局、この地道な接合作業に 3 か月も費やしました。

努力に努力を重ねた結果、ついにはすべての住居の新旧関係、ムラの変遷が判明



ムラから出土した多量の縄文土器

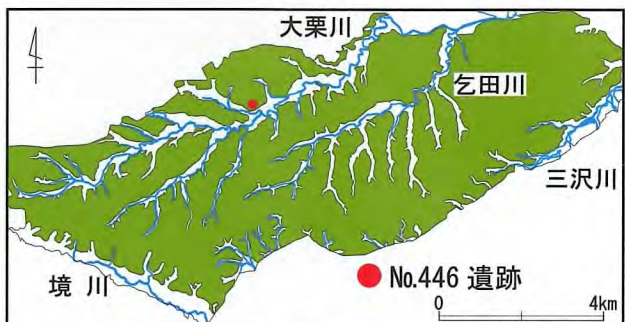
したので。そして、中期の大集落であるNo. 72 遺跡との関係もわかってきました（詳細は別の機会に）。

No. 446 は、私にとって、あまりにも考古学の試練を与えてくれた遺跡となりました。（山本孝司）

1/1964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

39 多摩ニュータウン No. 446 遺跡



多摩ニュータウンNo. 446 遺跡位置図

平成30年度企画展示
『蒼海わたる人々—考古学から見たとうきょうの島々—』関連共催事業

島とコラボ！

2018 秋 文化財ウィーク

当センター今年度の企画展示は『蒼海わたる人々』。今まで、あまり知られていなかった伊豆・小笠原諸島の考古学調査の成果について、実際に島からお借りした資料を展示してお伝えしています。担当職員は資料の調査や借用を通して、島の方々と交流を深めてきましたが、その中から「島との共催事業」が実現しました。というわけで、文化財ウィーク行事もたけなわの11月、5人の職員は、まさに蒼海わたる人々となって島々へと散ったのでした。島の方々の関心も高く、東京七島新聞や南海タイムスといった地元紙にも取り上げられました。

◆三宅島 11月4日(日) 於：三宅島郷土資料館

講演会と郷土資料館展示資料の解説イベントでした。講演会では、稀少貝オオツタノハを求める本土弥生人や式内社—由緒ある神社の多さなどを引き合いに、三宅島の歴史・文化が本土に劣らぬ豊かさやユニークさをもって展開してきたことが語られました。また、郷土資料館展示資料の中

には、奈良三彩の破片や中世の和鏡など貴重な品も多く、盛んに質問が出ていました。



三宅島と言えば雄山の噴火と全島避難の記憶も新しいのですが、熱心な質問には、島を大事にし、誇りに想う島の皆さんの気持ちが強く感じられました。

◆八丈島 11月23日(祝) 於：八丈町商工会研修室

講演会と遺跡出土資料を手に取って見学するイベントでした。八丈島の出土遺物には、本土との交流を示すものだけではなく、小笠原や南方との関連を示唆するようなものもあります。講演会で



まずは、企画展示について解説

語られたこれらの遺物を、実際に手に取っていただくことで、八丈島と本土や小笠原との距離感、これ



遺物を手に取ってみると実感がわく
解説にも力が入る

らの地域との交流のダイナミックさを直に感じていただけたのではないかと思います。

担当職員は前日遅くまで、遺物のネームプレートや解説文の準備をしていましたが、その甲斐あって大きな手ごたえを感じて帰ってきました。また、会場の賑わいぶりからは、歴史民俗資料館（現在改修中）の新装オープンへの期待も感じられました。

◆大島 11月25日(日) 於：大島町開発総合センター

まが玉についてのレクチャー&製作体験の親子イベントでした。大島には和泉浜C遺跡や八重川遺跡を始め、古墳時代から古代にかけて、実に多くの祭祀遺跡が営まれました。まが玉の出土も多いので、その歴史を知り実際に作る体験を楽しんでいただけたと思います。

日本人の家庭にホームステイ中の外国人のまが玉作りに挑戦。親子で相談しながらだと学生さんも会話はずむ参加されていて、思いがけず国際色豊かなイベントとなりました。古代日本の文化であると同時に現代にも通じるステキなデザインのまが玉は気に入ってもらえたようでした。



まが玉作りに挑戦。親子で相談しながらだと学生さんも会話はずむ

(両角まり)

蒼海わたる人々

考古学から見た **とうきょう** の島々

今回の企画展示では主に、東京の島々で発見された遺物から本州との関係や島々での暮らしなどを紹介し、さらには遠く南方文化の影響も受けていた可能性がある事も皆さんにご覧いただいています。

特に八丈島では、倉輪遺跡くらわいせきに代表されるように本州のいくつかの地域をふるさとにもつ土器がみられ、北からの文化が運ばれてきたといえます。また、島内各地域で採取された磨製石斧は舟を作るための特徴を持っており、南太平洋地域でみられるものとよく似ていることが知られています。このため八丈島は「縄文文化と南方文化の交差点」といわれています。

では、「とうきょうの島々」へ縄文文化や南方文化の影響を受けた「モノ」を運んだ人々は、いったいどのような人たちだったのでしょうか。

話は少し壮大になりますが、実は、現代社会においても私たちと南太平洋地域の先住民の人たちとは、祖先が氷河期(約 50,000 年前)から複数回にわたって、スダランド(現在の台湾およびフィリピン周辺)から北と南に分かれて移動した、同じモンゴロイド系の人種なのです。彼らは陸や海を徒歩や筏や舟を駆使して移動して行ったであろうことがわかっています。

氷河期が最も厳しかった約 50,000 年前にスダランドから北に向かった人たちは、ユーラシア大陸を横断しベーリング海を越えアラスカに到着しました。彼らはさらに南下して各地にその痕跡を残しながら北米大陸、中米をさらに南下し南米大陸でも先住民の祖となりました。一方では同じスダランドから、約 30,000 年前に南西諸島、南九州地方を経由して日本列島に移動して来た人たちもいました。

また、約 50,000 年前に南下した人たちは、陸路、海路を経てパプアニューギニアやイリアンジャヤの先住民、オーストラリアのアボリジニとしてその痕跡を残しています。さらに、約 30,000 年前に南下した人たちはその移動の過程において舟作りの技術や航海術を進化させ、メラネシアやミクロネシア地域に展開し最終的にはハワイ島やサモア島などのポリネシア地域まで到達したと考えられています。そ

うした中からマリアナ諸島に移動した人たちがいました。彼らはさらに北上して北硫黄島に痕跡を残し、八丈島まで到達した可能性があるのです。

同様のことは日本列島に移動して来た人たちにもあてはまるかと思えます。旧石器時代には氷河期に伴う海面下降のため、舟などを使用することはあまりなかったかと思われます。縄文時代に海面が上昇し、徒歩で行けたはずの場所も海が邪魔をすると、移動のため舟などを使用する頻度が増し、経験を積むことにより舟などを作る技術も航海の術すべも熟達し進化します。

目的地に着いた後は海岸から離れ、山野へ分け入り定住と移動を繰り返す、海岸に留まり海と生活を共にする、あるいはまた舟に乗り新たな地へ向かうなどライフスタイルは様々だったのではないかと思います。こうしたいろいろなタイプの移動を繰り返すうちに、海岸に拠点は置くものの、「交易」という需要と供給のバランスを図る役目を果たす集団が現れてきたのではないかと考えられます。

前述したように、倉輪遺跡には本州の複数地域から土器が集まってきていました。このことから、倉輪遺跡にはとてつもない「魅力」があったと思われるのですが、八丈島は遥か黒潮の向こう側です。それぞれの地域の地元の人たちが短時間で行ける所ではありません。そこで、自分たちが持っている産物と倉輪遺跡の「魅力」とを交換してくれる人たちに任せる、ということにつながっていくのではないのでしょうか。これは八丈島だけに限ったことではなく、日本列島各地でも有り得ることです。いわゆる「交易を生業とする集団」がそこに介在し、縄文時代の海上物流を円滑にしていたと思われるのです。

このような交易を専門的に担っていた「第三の人々」は、「海洋民」とも「海人」とも呼ばれ、列島各地で大きな集団になります。後の水軍を形成する集団ですが、古代から中世、近世を通して日本の海上交通の発展に大きな役割を果たしたのではないのでしょうか。(並木 仁)

※今号の表紙:日野市川辺堀之内遺跡から発見された、縄文時代中期末～後期初頭の敷石住居跡。敷石の残りが見事です。

